
翻 訳

マリーの思い出 オランダ編

— オットー・ノイラート 3 人目の妻の回想録 —

小 林 純[†]

解 題

(1) 紹介の理由

やや風変わりな資料を翻訳紹介したい。資料自体の説明は後に回し、なぜいまこれを紹介したいと思ったのかについて記し、資料内容の一つの受けとめ方として示す。とりあえず、東京五輪のピクトグラム、電子マネー議論の喧騒化、新国立競技場騒動、としておく。

1. 東京五輪のピクトグラム

五輪開幕が近づくなかで、最近では、2019年3月12日に発表されていた「競技ピクトグラム」がメディアを賑わし、今回のデザイン担当者廣村正彰氏も登場回数が増えた。彼が前回東京五輪のときの亀倉雄策氏の業績を、とくにその一種のシンプルさを高くリスペクトしていることも伝えられる。当時田舎の中学生だった私にすら、亀倉作品の鮮烈な印象は強く残っている。ただ、「ピクトグラム」という語は、素人には、つい最近までそう馴染みがあったとは思えない。その効能は、言語を介さずに特定の情報を伝える、というところにある。

この「見ただけで分かる」作品の最高傑作といえるのが例の「非常口マーク」だろう。いまは国際基準 ISO 仕様になったが、祖型は日本人太田幸夫氏の作品だ。太田氏も一員であった1960年代に始まる日本のピクトグラム・デザイン開拓運動の中に、マリーは登場していた。雑誌『グラフィック・デザイン』42号(1971年7月)には太田氏の論稿「LoCos—実験的視覚言語の考案」が掲載されているが、この号には、当誌がロンドンにいたマリー・ノイラート(1898～1986)に依頼した論稿「オットー・ノイラートとアイソタイプ」も英語と日本語(渥美博章訳)で掲載された。この論稿は、マリーとオットーの活動内容のそれ自体として貴重な具体的描写を含むと同時に、マリーの了解可能な範囲でという制約は当然あるが、オットーの多面的

[†] 立教大学名誉教授 E-mail : kobajun@rikkyo.ac.jp

活動の相互関連と全体像¹⁾ 理解するための、現在でも最良の文献の一つをなす。「アイソタイプ」という名辞はオランダ時代に生まれた、と本資料にある。私は「国際図像教育制度」と訳してみた²⁾。その真髄をオットーは、「コトバは人を分ける、図像は人をつなぐ」と表現していた。

東京五輪が「人をつなぐ」善き機会となれば、という思いは、私にもある。

2. 電子マネー議論の喧騒化

これはもちろん「揶揄」的表現のつもり。「リブロ」論議がかなりの広がりを見せている。電子マネーによる財・サービス取引決済の進行は、世界の「情報経済」の進行であるかのごとく観念されかねない。財・サービス取引は厳然としてあり続け、その取引の国際化の進行が議論の背景なのだが、貨幣を支払手段とみれば物理的な貨幣譲渡なき振替で取引が可能だという議論は百年以上前からあった³⁾。だが電子マネーのインフラが壊れたらどうなるか。無茶な想定と思われるが、決済手段の機能不全という事態は歴史上にはある。戦時である。また戦時となれば敵陣営との交易が絶たれ、一国としては戦争遂行に必要な物資を自陣側で調達するほかはない。そのとき物資は「価額」でなく「実物の数量」で計測される。宇宙船地球号を自陣とする人類軍の調達可能物資も「実物」で計算しなくてはならない。オットーの「実物経済」論の想原をこう捉えておこう。歴史過程の描写や国別の資源保有にアイソタイプを応用したものがオランダでの作品『近代人の形成』(*Modern man in the making*) である。実物経済 (natural economy) は「自然経済」と訳すほうが彼の思想全体との関連を上手く表現できるため⁴⁾、どちらを採ってもよからう。第二次大戦中に、この社会民主主義者の書が、日本で検閲をパスし書籍出版用に紙の配給を受けた。『現代社会生態図説』(高山洋吉訳、慶応書房、1942年) である⁵⁾。いま稀観本の感もあり、最近『ISOTYPE [アイソタイプ]』(永原康人監訳、ビー・エヌ・エス新社、2017年) に、図像部分が収録された。マリーの姓 (Reidemeister) をランデマイスターとするなど安直な出版物の感もあるが、図像部分は写真版で問題ない。

1) とりあえず、小林純「幸福学者ノイラート—知識と実践—」、『立教経済学研究』60-4, 2007. 3。現在の到達段階を示すのは、桑田学「オットー・ノイラートにおける物理主義と経済科学」、『立教経済学研究』70-3, 2017. 1。『世界の表象 オットー・ノイラートとその時代』(武蔵野美術大学資料図書館, 2007。展覧会カタログ) の「ごあいさつ」(神野善治) には「アイソタイプ＝国際絵ことば」とある。

2) 小林純「不確実性、秩序、倫理—最近のドイツ経済学史の研究から—」、『季刊経済と社会』48, 時潮社, 1997.2 (『ドイツ経済思想史論集 I』唯学書房, 2012に収録)。K. トライブ『経済秩序のストラテジー』(ミネルヴァ書房, 1998.10) 第6章も参照。

3) G. F. Knapp, *Staatliche Theorie des Geldes*, Leipzig: Duncker & Humblot, 1905, S. 144.

4) 自然経済論の意義を受け止め、分析し、思想史上に位置付けたのが、桑田学『経済的思考の展開—世紀転換期の統治と科学をめぐる知の系譜』(以文社, 2014) である。

5) 牧野邦昭『新版 戦時下の経済学者：経済学と総力戦』中央公論新社, 2020年, 204頁。

3. 新国立競技場騒動

新国立競技場ザハ・ハディド案撤回についての、森喜朗・安藤忠雄2名一緒の、まるで「醜悪」概念を具現する見本のごとき記者会見をご記憶の方もあろう。ユー・チューブ上でも削除されたいこの迷場面をTVで見た私は、モンテリオール大会では市長について「財政調査委員会報告書」がハッキリと「彼は自分の果たすべき役割に必要な才能、知識にまったく欠けていた」と書き残した（小川勝『オリンピックと商業主義』集英社新書、2012、117頁）ということ思い出していた。急遽決められた競技場のデザインは隈研吾氏のもので、さきごろ現物が完成した。安藤の建築史の記述では、「近代」を象徴するドイツ・バウハウス運動が好意的に紹介される。だが第一次大戦直後のヴィーンには、安藤の触れない、建設史上ユニークな展開が見られた。終戦後、崩壊・分裂したハプスブルク朝の軍人や官吏を主とした帰還民がヴィーンに流入した。住宅難への対応のさなか、私が「住宅地開発運動」と名付けた動きの中に、意欲的な新しい住宅文化の創造の試みがあった。バウハウスでの「鋼材とガラス」が大資本の工業産品であるのに対し、物資不足のヴィーンでは、身近な原材料で作れる木材とレンガ、漆喰を用いた低層の長屋構造のものが、未来の住人の労働で建てられた。台所やトイレにも工夫がなされた。ヴィーンの観光名所を飾る作品でおなじみのアドルフ・ロースも関与し、トイレは水洗でないほうが畑の肥料に使えるのでお薦め、などとしていた。この運動の仕掛け人で、中核で支えたのがノイラートである。住宅展示館を社会経済博物館に発展させ、その展示用に開発された「ヴィーン方式」の発展型がアイソタイプである。博物館設立準備中のオットーの脇にはマルガレーテ・リホツキ（結婚後はシュッテ＝リホツキ）がいた。この伝説的建築家グレーテ⁶⁾は、オットーの運動に建築家として関わり、運動収束のころフランクフルトに移り、そこで「フランクフルト式キッチン」を考案し、それが当地の数万の住居に提供されたという。現物はヴィーン応用美術大学資料館に設置されている。資料館は「MAK」の愛称で知られる応用美術博物館として一般開放されており、日本人観光客を含め来館者が多い。グレーテの渡独後、マリーが傍に来た。社会経済博物館の運営のために雇われ、以後ずっと活動を共にした。安藤が尊敬するル・コルビュジエ設計の団地を二人でスイスに訪ね、住民が「有名人の設計」を誇るコストが「住人の使い勝手の若干の不便さ」であることを見てきた。隈研吾氏の教員時代、東京大学工学系研究科（建築学専攻、隈研究室、2011年度）に石田遼氏が「ピラミッドからネットワークへ オットー・ノイラートの5つの活動とその現代性」と題する修士論文を提出している。オットーは建築家ではないが、1920年代前半のヴィーンでの運動には歴史的に特

6) Margarete Schütte-Lihotzky, 1897～2000. オーストリア初の女性建築家。グレーテは愛称。コミュニストとして反ナチ運動でも有名。2004年に自伝『なぜ私は建築家になったか』（*Warum ich Architektin wurde*. Salzburg: Residenz）が出た。2005年の「ヴィーン市民の日」イベントのテーマは「女性の力」。担当の市職員の挨拶で Yoko Ono とグレーテの二人が取り上げられた。ヴィーン5区に彼女の名を冠した公園がある。

異な意義がある。また住宅地開発運動とその展示館，そこから博物館運動へ，というのが図像教育・アイソタイプの出生過程である。本資料の別の章にあるが，グレーテは二人とオランダで会った。

最近のニュースに触れ，アイソタイプの出自に関わるこの回想録を開示しておくのも無駄ではないと思い始めた。訳稿は10年以上放置されたものに手を加え，訳注を添えた。

（2）資料の説明

原テキストは，オーストリア国立図書館にある「オットー・ノイラート遺品」中のファイル「私が思い出すこと」(Marie Neurath, An was ich mich erinnere, in: Otto Neurath Nachlass. In Handschriften-, Autographen- und Nachlass-Sammlung, Österreichische Nationalbibliothek. 部署名は改組後に変更，2008年4月からはSammlung von Handschriften und alten Drucken)である。独文でタイプされたもの(A4版119枚)を筆写した。マリーの死後，図書館がオットーとマリーの遺品群を購入し，所蔵している。タイプ稿のコピー版はハーレムにある北オランダ文書館(Noord Hollands Archief)別館にもある。

当初はオランダ・ヴィーン学団研究所(Wiener Kreis Stichting)元所長ムルダウ氏によるインタビュー企画だったが，マリー本人に書いてもらうことになったようだ。全体の構成は，「I. 若い頃 1. 子供時代，2. 学校時代，3. 大学時代，II. オットー・ノイラートとともに 1. ヴィーン，2. オランダ，3. イギリス，III. オットー・ノイラートの死後」となっている。末尾には「1980，1982」とあり，1980年に脱稿，82年に見直したものと想像される。以前，IIの「1. ヴィーン」から5パラグラフだけ紹介したことがある⁷⁾。

なぜ「オランダ」か。社会民主主義派のノイラートはヴィーンのファシストににらまれており，1934年2月の武力衝突のさい当時安全なオランダへ逃避した。またファシストの侵攻のさいにオランダを脱出するが，この劇的な映画的一幕のような展開が本資料に描かれる。彼らはファシズムとナチズムから命賭けで逃げた。本資料は歴史的にも貴重な証言である。

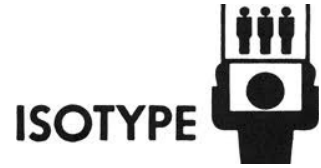
なぜ「3人目の妻」か。最初の妻アンナ・シャピレは長男誕生のときに亡くなった。二番目の妻オルガ・ハーンの死去は本資料に描かれる。イギリスに脱出後，オクスフォードに落ち着いてからマリーとオットーは正式に結婚した。(24. 01. 2020.)

〔追記〕

昨年(2019)から今年にかけてロンドンで開かれる幾つかの催しの宣伝をウェブで知り，その中に「Women in Print Study Day: Marie Neurath and Her Contemporaries」，「Marie Neurath: Picturing Science」なるものを見つけた。マリーの再評価の機運が，いまある。(03. 02. 2020.)

7) 小林純「資料紹介 オットー・ノイラート」，『立教経済学研究』64-4，2011年3月。

第2章 第2節 オランダ



ハーグで私たちは、まずパンジオンに逗留した。オットーは、ブラハからポーランドとデンマークを経由してオランダに到着し、すでに数日前からそこにいた。最初になすべきは、すみかを探すことだった。びっくりするような出物があつた。ある戸建て住宅（‘Bovenhuis’）の2階と3階からなり、1階にはおまけの部屋も付いていた。2階の住居には大きなガラス張りのベランダがあつて、3階のその真上部分はバルコニーになっていた。3階の住居は、オットーの荷物とオルガが到着したときには、もう私の家具が入っており、すぐにも住めるようになっていた。オルガはヴィーンからユトレヒトまで直通の列車で来た。ユトレヒトでアンネッケ・デ・カンターが彼女を迎えた。私たちに仕事場として一部屋を提供してくれたフレデルス女史は、スヘーフェニンゲン・ボシェス地区の住宅地（Kanaalvilla）に大きな住居をもっていた。私はそこまで自転車で通ったが、いい気晴らしになった。その後はかの協力者が到着して、フレデルス女史が耐えられないほど仕事場がうるさくなってきたので、私たちは仕事場用に住み家からそう遠くないオーブレヒト通りに別の住宅を借りた。

私たちは、すでにヴィーンで受けていた委託の仕事をつ二つ片付ける必要があつた。一つは、ノルウェイの労働者教育本部のためのスライド・シリーズ、もう一つは、ベーシック・イングリッシュのC・K・オグデン⁸⁾のために二冊の本、『図像教育による Basic』と『国際図像言語』を仕上げることだった。この二冊の作業のために、私たちは「ヴィーン方式」に代わる新しい名称を考えださなくてはならなかった。ある月曜の午後、私はオットーの家の居間の食卓についていた。彼はちょうどアムステルダムに出かけており、オルガもたしか家にはいなかったと思う。私はいろいろ試して、頭文字を使った「バイシック Basic」というオグデンの方式にならって、「アイソティップ Isotip」（International System Of Teaching In Pictures）というのにたどり着いた。だが、これでは名称としては受け入れられるものではないので、「アイソタイプ Isotype」⁹⁾としてみた。それから、是が非でもこれが頭文字の組合せとなるような、母体の言葉を見つけたさねばならなかった。百パーセント巧くいったとはいえないかもしれないが、捨てるにはもったいなかった。オットーが帰宅すると、私は言った。「あなたにプレゼン

8) Basic English オグデン (Charles Kay Ogden, 1889～1957) が考案し普及を目指した British American Scientific International Commercial の略称。850語よりなっており、うち600語が名詞、150語が形容詞と副詞、100語が動詞と接続詞。ほとんどが図像をもちいて学べる。ラウトリッジ社の編集者だったオグデンには『意味の意味』（共著、邦訳あり）など言語論・哲学などの著作がある。

9) Isotype Iso はギリシャ語で「同じ」、type は「型」。少数の同じ型を組合せて高度な内容を伝達しようという意欲が込められた。母体の言葉としてマリーがひねり出したのが International System Of Typographic Picture Education。

トがあるの。」彼は喜んで受け取ってくれた。翌日、彼はアルンツに、このシンボルマークを考案してくれるよう頼んだ。

1934年のプラハで行われる国際科学者会議準備会議にむけて、オットーと私は、毎日夜まで書類の作成作業をしなければならなかった。私たちは疲れて帰宅したが、それをオルガはうらやましがった。彼女は手持ち無沙汰な様子で座っていた。オットーはラジオ受信器を一台調達し、彼女はそれで三局を聞くことができた。彼女はオランダ語の習得に精をだした。まもなく客も来るようになった。その中に、オランダ領インド〔インドネシア〕で育った三姉妹がいた。彼女たちは、結婚しており歳も若くはなかったが、すごく親密にしていた。その中の一人がよくオットーを訪ねてきて、哲学の勉強をさせてもらうことになった。一人はとりわけオルガの面倒をみてくれ、一人は私に歌のレッスンをしてくれた。私たちは、後にこの歌の先生のお宅でオトレ¹⁰⁾と再会することとなる。先生の娘さんはときどき私と一緒に歌ったが、彼女がしばらくの間オトレの協力者として働いていたのだった。彼女はその後、ユネスコの図書館司書となった。私は二度、彼女をユネスコに訪ねたことがある、一度は古い建物の時、もう一度は新館になってから。

1934年には、骨身にしみる体験が二つあった。一つ目は、役所から電話がきたときのこと。ノイラート博士が、不当に博士の称号を名乗っているのではないか、というのだ。調査に応じて役所に出頭することになった。オットーは学位免状を示したので、ことはただちに片が付いた。でも、しばらくの間私は、電話が鳴る度に不安を覚えたものだ。例の電話がくる少し前のこと、私たちのところにオーストリア人の訪問者があった。とても親しげな人で、祖国戦線に属している、とも言っていた。私たちは彼がオットーへの嫌疑と関係していたのかもしれない、と考えた。オットーがしばしば口にしていたが、オーストリアではドイツで得た博士号は認められず、そのため彼はオーストリアではそもそも博士とは名乗れないのだ、と。

もう一つの方は、説明するのが難しい。ロシアの契約相手から、契約はロシアの法律に違反しており、契約解約に際して決められた支払いはなされない、という手紙がきた。オットーはロシアの裁判所におよそ正義などないことは承知していた。彼は私に、ソフィー・リシツキー¹¹⁾にこのことを知らせる手紙を書いて欲しいと言っただけだったが、何の効果もなかった。こうして絶対的窮乏の時期がやってきた。Basicの本の仕事が終わると、ベルナートは私たちのもとを去った。私の家族は月々の仕送りで私を支えてくれた。収入があまりに少なく、あまりに高い税金の支払いに耐えられず、国外退去になるのではないか、という不安にかられた。その後、再度きちんと自立できるようになったときに、ようやく高い税金にも耐えられるよう

10) Paul Marie Ghislain Otlet, 1868～1944. ベルギー人。図書分類法 UDC の考案者。情報学から平和のための国際活動に邁進。

11) Sophie Lissitzky-Küppers, 1891～1978. ドイツ生まれの美術史家、El Lissitzky と再婚してソ連で展覧会準備の仕事をしていた。

になった。そして事態は再びうまくいくようになった。私たちはオランダで契約をもらおうと試みた。フレデルス女史の兄弟が駆け回ってくれたり、印刷所社主のケルダイク氏が展示会を開いてくれたりしたが、だめだった。この間私は、それでもいいじゃないか、と思った。頭上には屋根があり、素敵な住居がある。休暇旅行なんか無くたっていい。居心地のよい部屋の中、ソファーに身を横たえて、私はグリルパルツァーを最初から最後まで読んだ。まさにこの失業の時期にも、オットーは作業を止めることができなかった。あるとき、私たちはまだ事務所にいたが、すでに真夜中の2時だった。私は「もう、やれないわ」と哀訴した。ようやく彼も軟化した。ヴァン・クレーク女史がアメリカでの私たちの仕事の市場分析をやってくれた。これは何にもならなかった、少なくともいいことはなんにもなかった。この研究の助手（往時の協力者でヴィーンのルドルフ・モルダイ）が、ノイラートはアメリカを分かってない、彼とは一緒にやれない、と宣言した。彼は顧客住所録を自分でコピーし、それで独立を試みた。私たちが世に認められ、私たちの協力が求められるようになって、ようやく良き時代の訪れとなった。

1936年の初めだっただろうか、ニューヨークからクラインシュミット博士が私たちを訪ねてきた。彼は全国結核撲滅協会で保健教育の責任者だった。彼は任務のために参考になるものや新たなものを集めようと欧州調査旅行をしていた。彼が発見したのはドレスデン衛生研究所とアイソタイプだった。こうして長きにわたる生産的な協力が始まった。表現法の新たな問題に取り組むことは興味深かったし、私たちが製作した移動展示会が、五千部も作られてアメリカの津々浦々を回り、どこでも喜んで受け入れられたことには満足した。この仕事を通して私はルーズベルトが再選された（1936年11月）あとに、最初で最後のアメリカ旅行を経験した。フレデルス女史も当時ニューヨークにいて、ヴァン・クレーク女史や私たちを泊めてくれた。あるとき彼女はオットーの講演に人を招き、講演の後、大きな食卓を囲むこととなった。各人がちょっとしたスピーチをやることになり、オットーは当然ながら眉一つ動かさずに話した。でも私は、出番が近付いてくるにつれて恐くなった。何も言うことがないのでごめんなさい、と言うほかなかった。隣にいたフレデルス女史は「そう、私ども内気な欧州人はね」と、すぐにフォローして、助けてくれた。別のレセプションのとき、訪問客が列を作っている男性のそばを通り過ぎた。お願いだから誰かと長話をしなくて済みますように、と祈った。幸いなことに、私たちに馴染んだやりかたでの、何人かの人との出会いもあった。ナーゲル¹²⁾、マイヤー・シャピロ¹³⁾、シドニー・フック¹⁴⁾である。私たちは、クレーク女史の秘書で、しばらく中国にい

12) Ernest Nagel, 1901～1985. 10歳のときメーレンから移住。科学哲学者、カルナップらと論理実証主義運動に関与。邦訳に『科学の構造 一般編・自然科学編・社会科学編』（松野安男訳、明治図書、1968～69）。

13) Meyer Schapiro, 1904～1996. リトアニア生まれの美術史家、この当時はコロンビア大教員、反戦運動に関与。後年ハーバード大教授。

14) Sidney Hook, 1902～1989. ユダヤ系オーストリア人移民の子。哲学者、マルクスおよびマルクス主

たことのあるラッセル女史のお宅で、リン・ユータン¹⁵⁾にも出会った。リン・ユータンは、当時ちょうど行われていたモスクワでの裁判について、私たちと同じようにイライラしていた唯一の人だった。その他の人は誰もこれについて話さなかった。ソヴィエト連邦のことは、アメリカの学校では地理の授業ですら扱ってはいけないのだ、と聞かされた。私たちは一度、教育行政担当の人に、とりわけ才能のある子供と、とりわけない子供とが混ざっている実験的学校の案内をしてもらった。子供たちが集会を開いて、なにか運営のことがらを議論している場面を思い出す。大きな、才能に恵まれない若者が議長を務め、まわりがゆったりと彼を支えており、才能ある小さな子供が元氣よく議論していた。灰色の髪をした私たちの案内人は、この小さな子の立場に異論を唱えた。「申し訳ありませんが、あなたは私を誤解しています。私が言ったのはこういうことです、云々」と言われて、案内人は、失礼しました、と応えた。私たちが帰るとき、女性の校長先生が晴れやかな笑顔で校門までおくってくれた。別れの間際、一瞬振り返った私は、彼女が暗く心配そうな顔をしていたのを見てしまった。

とりわけ素敵だったのは、私たちが突然、メキシコに招待されたことだ。高等教育省が産業博物館を設立しようとしていた。私たちは助言と教育を行うことになった。この件は、アリス・リューレ¹⁶⁾のおかげだ。彼女はこの省で通訳として働いていた。オットーはドレスデン時代からシューマンを通じて彼女を知っていた。彼女はエーファと同じく翻訳者として、例えばフランス語からドイツ語に移すなどの仕事をしていたのだ。彼女はデュアメルを訳し、彼に会いに行った。今回、彼女はノイラートのドイツ語の論説をスペイン語に訳し、私の方は英語のできる人に英語の授業を何度か行った。私たちはみんなで一緒に鉱山町まで遠足に行き、銀鉱山を見学した。坑内の粉塵がひどくて鉱山労働者は三年で死んでしまうのだ、という説明があった。この遠足の後、私はそこで習ったことについて数枚のスケッチを作成した。オットーが大きな劇場で、技術博物館の課題と可能性についての講演を行った際に、私の小さなスケッチが大きなスクリーンに投影された。メンディサバル教授は喜んだ。彼は、この遠足が実際にも——見学後の飲み会だけではなく——役にたったことを理解できたわけだ。彼の妻は飲み会の方を心配していたのだけれど。実際、彼は帰りまでには酔っぱらい、私たちを自分の車に乗せることはできなかった。彼は途中、印象的な石像やピラミッドのあるテオティワカンを案内してくれた。私は月のピラミッドに登った。彼はまた、意気だった若者気質（pachuco）のままに私たちと一緒に周りの高い山にも登った。モミの木ばかりが繁っていた。山からは東の方に山並みがつづく広大な眺望が楽しめた。

義の研究は有名で邦訳も数冊ある。

15) Lin Yutang, 林語堂, 1895～1976. ライプツィヒ大で中国哲学博士号取得。英語・中国語で言語学・哲学・小説などの著作活動、当時米国に住み始めた。

16) Alis Rühle, 1894～1943. オットー・リューレの妻。ユダヤ系ドイツ人、心理学者、社会運動家。ナチを逃れてプラハへ。のち夫とメキシコに来た。画家フリーダ・カーロらとも親交があった。

メンディサバルは大学教授で、同時に教育省にも職をもっていたと思う。博物館館長らしき別の人が説明してくれたのだが、彼は中国人を含めた非常に多くの人種の人々と交流を持った経験があるそうだ。彼は本を一冊刊行していた。アリス・リュールは、彼はその中でたった一冊しか文献を挙げていない、と笑って説明してくれた。とはいえ彼は、ある程度は博識であったに違いない。というのも、彼はオットーに、哲学の分野で重要な役割を演じている、かのオットー・ノイラートのことを尋ねていたからだ。当の人物が目の前に立っているなんて、全く思いもよらなかった。あるときオットーは、哲学に興味をもつた別の人と活発に会話をしてきた。「なんていい人なんでしょう。」「うん、すごくいい人だね。でも彼はいつもピストルをもっていて、他人が自分の意見と違っていると、ぶっばなすんだよ。」——また私たちは、メキシコでいくつもの革命を経験した家族のお宅を訪ねた。オットーが「そのときあなたは何をしましたか？」と尋ねた。「そうさね、乳母車を裏の部屋に動かしたよ。」

空はいつも青かった。ゼラニウムが壁にそって屋根のすぐ下まで伸びていた。私たちの住んでいた通りは美しく、棕櫚の並木がチャプルテックまで走っていた。チャプルテックは公園のような山で、ハチドリが飛び回っていた。上の方にある城は、当時は統計局になっていて、私たちはときどきそこへ出かけた。山腹にはデッキチェアが置かれ、貸出用書を備えた小屋があった。そこでは読書ができたし、だれもその本を持っていくことはなかった。(ニューヨークでも、通りの真ん中の郵便ポストの上に、大きすぎて投函口から入らない小包が置かれていても、誰も持っていく人はいなかった。) 街の下の方にもいくつも公園があった。メキシコシティーは、もっともっと歩き回って、街角をまわるとどんな素敵なのかがまっているのかを発見したくなる、そんな街だ(あるいはそんな街だった)。

オットー・リュール¹⁷⁾には、最初の結婚でできた娘が一人いて、メキシコで結婚していた。彼がまだドイツにいた頃、娘を訪ねようとハンブルクで往復の切符を手に船に乗った。切符をチェックする係員が、「なんと、帰りの切符ですか？　こんなものを買ってしまうなんて、あなた、ずうっと後悔しますよ。」あるときリュールが通りを歩いているのを見た。私の乗っていたバスが彼の横を通り過ぎたのだ。彼の歩きっぷりがなんとまあ幸せそうなことか、文字どおり眺めることができた。白髪の立派な頭、背丈は小さかったが、エネルギーに満ちあふれていた。アリスは初め、似顔絵でしか彼のことを知らなかった。木版画だったが、それを見てこの人と結婚しようと決めた。彼は政治的には活発で、極左だった。だが党内で気に入らないことがあって党を離れ、独自の組織を創設した。『ミヒャエル・コールハース』¹⁸⁾がお気に入りだった。かつてはモスクワでレーニンと並んでデモ行進し、生き生きとこぶしを天に突き上げていたこ

17) Otto Rühle, 1874～1943. アルフレート・アドラーの弟子。ドイツで労働運動家、ソ連を国家資本主義とみた共産党内反ボリシェヴィズム派。1936年メキシコに移り、トロツキー弁護のための活動に参加。

18) ハインリヒ・フォン・クライストの1810年の小説。

ともある。逮捕されなかったときには、レーニンがそれを差し止めた。今はトロツキーがメキシコにいて、リューレは毎週彼を訪ねていた。彼はさらにジョン・デューイの「プロジェクト」でも何かの役割を担っていた。彼はオットーに、一度トロツキーのところに連れていきたい、と申し出ていたが、オットーは望まなかった。リューレ夫妻は、私たちにとって良いと思われることは何でもしてくれた。私たちはメキシコがとても気に入ったので、のちに移住することもある——ただ、アメリカでの仕事でもっと確実な収入が得られさえすれば、の話だったが。リューレがいつ亡くなったのか、もう覚えていない。夫の死んだすぐ後、アリスが走行中の列車から飛び下り自殺した。オットーは大きな衝撃を受けた。彼女がそんなことをするなど想像していなかったのだ。

メキシコからニューヨークへの帰り道、私は結核予防パンフレット用のスケッチを作っていたが、これを帰ってから提案し、最終案ができた。いつだったか、オットーはシカゴのカルナップ¹⁹⁾とモリス²⁰⁾のところへも行った。彼はそこで、子供用百科事典しか出していない出版社に呼ばれた。この会社は毎年新版を出していた。オットーはそこでいろんな制作者のたくさんのイラストがまとめてあるのを見たが、その中に私たちの『社会と経済』もあった。そしてこの会社は私たちに、毎年一連のイラストを作って欲しいと望んだ。私たちは引き受けた——そのあと戦争がやってくるまで。もっとも私は抑留中にすら、この会社用のスケッチをまだ作っていたのだけれど。こうして私たちは有益な契約を携えて帰国した。ロンドンで帰路を中断し、ゴードン・スクエアのオグデンを訪ねた。彼は実においしいお茶を出してくれた。

帰国してからまもなく、オルガがハーグに戻ってきた。私たちの訪米中ずっと、彼女はヴィーンの母のところにいる。私たちはオルガの外見が変わったのに気付いた。彼女は、小麦粉ばかりのヴィーン風の食事のせいだ、と言った。またコンサートに行くなど、私たちはしばらくの間、普通通りの生活をおくっていた。オルガは、盲人として二枚の無料入場券をもらった。私はときどき一緒にスハーフェンゲンの保養所に行った。この券を手配してくれる女性も彼女を訪ねてきた。この人は自分の精霊体験を話した。その後私を一度招いてくれたとき、「あなたは、ほかのだれかがいても、嫌じゃないですよ。」周りを見たけれど、私には誰も見えなかった。「いえ、あなたに彼女は見えません。彼女は死んだ人の霊なんです。でも弱すぎて、私に保護をまかせているんです。」コンサートの帰り、私ははじめてオルガの腫れに気付いた、彼女は気分がすぐれなかった。入院して分かったことだが、腎臓の一つを切除せねばならなかった。はじめはすべてが順調だった。私が病院にお見舞いに行くと、彼女は「あなたたち二人、

19) Rudolf Carnap, 1891～1970. 論理実証主義の哲学者。1926年からヴィーンで活動、ヴィーン学団のメンバー。1935年に渡米。ノイラートと大量に書簡を交換、それが「ノイラート遺品」に残されている。

20) Charles William Morris, 1901～1979. 米国の哲学者。論理実証主義に影響を受け、統一科学運動を支えてノイラートの協力者となる。

すぐに結婚してね」と言った。私は、彼女が自分と私たちのためにそれを望んでいることに喜んだ。私は「また良くなると思うわ」と言ったが、本当にそう思ったのだ。そして翌日、ヴィーンから訪ねてきたドーラ・ルッカが病院へお見舞いに行く時、私は一緒に行かなかった。オルガは来て欲しいと望んでいたけれど。私はどちらかといえば、また一人で彼女のところに行くつもりだった。つづいて次の日にオットーが見舞いにいった時には、もうオルガは彼のことが分からなかった。彼はしょんぼりして帰宅した。オルガは1937年7月20日、55歳の誕生日に亡くなった。私たちの友人である三人の姉妹は、火葬や、ホーヘ・フェリユーエ公園 (Hooge Veluwe) にある彼女たちの所有地に骨つぼを保管することなどを手配してくれた。オットーがあんなに泣きじゃくり、涙を流しっぱなしにする様を見たのは、後にも先にもこのときだけだった。若いオランダ人女性のホース・ルカスは、沈みこんだままだった。彼女にはずっと後年、もう白髪になってから再会した。彼女が言うには、オルガは彼女が自分の人生において出会った一番思いやりのある人だったそうだ。

オルガはいつも私たちの食事をつくってくれた。八百屋や牛乳配達やパン屋は家まで来てくれていた。彼女が亡くなってから、私たちは温かい食事を家まで配達してくれる会社のことを知った。私たちには、アメリカの契約や統一科学百科について、やるべきことがたくさんあった。これに、まもなくオランダでの契約も付け加わった。保健省からのものがあつた。それからヴィルヘルミーナ女王即位40周年記念の準備を行った。百貨店「バイエンコルフ (De bijenkorf)」は、一つの展示会を三つの支店のために三種の形にアレンジしたい、と注文してきた。テーマは私たちに委ねられたので、「レンブラントをめぐる」というのを選んだ。アムステルダムでレンブラント展をみたとき、こういうのをやってみたいという願望が芽生えていたのだった。私はその展示会をよく観察したが、その後オットーがやってきたとき、彼に、腹立たしくなる展示のことや、どうやったら観客にもっと良いサービスを提供できるかを相談した。当然ながら「バイエンコルフ」はお客を百貨店に呼び込みたいのだ。オットーは私たちのヴィーンでの「現代展」の経験を応用して課題を解決する装置を考案した。次の機会にバイエンコルフが注文した展示会は、ずとうまくいった。「車輪は廻る」という展示会で、この時は実際に車輪を会場で廻したのだ。オランダでは当時、ちょうど鉄道員百周年記念だったのである。

私たちの友人ジョン・プロントは、メッツ・アンド・カンパニーに勤務していたが、職場のある女性職員のことを話してくれた。彼女は、博物館に行くと、いつも何かもの足りない、という気分になったそうだ。彼女は私たちの「レンブラントをめぐる」を見て、人が何に意識を向けるのかを初めて理解したのだという。こうした影響があるから、私たちの仕事はやりがいのあるものなのだ。私たちは助言を仰ぐべく芸術史家のホルスト・ゲルソンと連携をとった。ゲルソン夫妻とは、フレンケル²¹⁾夫妻を介して知り合った。(フレンケル夫妻がアントワープ

21) Hermann Ferdinand Fränkel, 1888~1977. 古典学者。ナチを避け1935年にアメリカに移住、スタンフォード大教授。

から船でカリフォルニアに移住する時、ゲルソン夫妻と私もアントワープにいた。夫妻はヘルマンと一緒にあちこち訪問にでかけ、私はリリーと一緒に過ごした。)夫人はおおよそ否定的で、私たちの展示会計画を見下してすらいた。夫のほうはずっと寛容だった。この夫妻のところにはときどき訪問したが、私は喜んで行ったものだ。夫妻が「二人居眠り用物書き机」と呼んでいた机のある部屋で、私たちはよく会話を楽しんだ。

私たちの交友関係は広がっていった。ジョン・プロントは夫人のテートに促されて私どもを訪ねてきた。彼女がフレデスハウスでオットーの講演を聞き、ジョンに「あなた、この人とお付き合いすべきよ」と言ったそうだと。この夫妻とも、私どもの家や向こうのお宅でしばしば会った。あるときオットーは、家が散らかっていて申し訳ない、と言うと、彼女は「活き活きてますね」と返した。ジョンを介して私たちは、オランダのいろんな詩人や小説家と知り合った。彼は反ファシズムの文筆家の協会で組織運営の活動をしていた。私たちはデ・カンター家にもしばしば招かれた。ピエトはフォンデル²²⁾などをよく朗読した。あるとき私たちは、トーマス・マンを尊敬するオランダ人だけの小説家サークルの中にいたことがある。当時マンはオランダの海岸に暮らし、「ヴァイマルのロッテ」を書いていた。トーマス・マンは、彼に話しかけてくるオランダ人の独特な響きをもつドイツ語を喜んだ。こうした人々の中にメンノ・テール・ブラーク²³⁾がいた。彼はヒトラーとラウシュニクスの対話を翻訳した。ドイツが侵入してきた時、彼は自殺した。オットーは彼のことをとても嘆いていた。なぜ彼は、私たちのように脱出を試みなかったのだろうか……。

まもなく重要な人たちと接触した。マヌーリ²⁴⁾と彼のグループのことである。私は、例えばエッシュのことは覚えている。本名はシェファーズといった。だが一番密なコンタクトはダフィット・ファン・ダンツィヒ²⁵⁾とだった。彼はハーグ近くの街ヴァッセナールに住み、当時はデルフトの数学教授で、ドイツ人女性と結婚していた。もう一人の数学者ハーゼブレック(Piet Hazebroek [1907-1971])は、ウィーン学団に郷土愛のような意識を持っていて、統一科学ではオットーを助けてくれた。彼はまた、ドイツの人たちに手紙を書き、あるいは署名をした。オットーが自分のサインのために、受け取ったドイツ人を危険な目にあわせたくなかったからである。彼の妻ジャンヌは、私たちの仲間の中でもドイツ語が分からない少数者の一人だった。だから、私がオランダ語の授業を受けて、それで彼女と接することができたのは本当に良かった。このハーゼブレック夫妻、そしてプロストには感謝している。オットーが哲学者の友人や議員たちと交わした書簡が戦争を生き延びたのはこの人たちのおかげだった。(プロントは、

22) Joost van den Vondel, 1587～1679. オランダの著作家、戯曲作家。

23) Menno ter Braak, 1902～1940. オランダの文筆家。1932年に同志と文芸誌「Forum」を創刊。

24) Gerrity Mannoury, 1867～1956. アムステルダム大学で数学を教える。社会民主党・共産党党员、1929年に除名されている。

25) David van Dantzig, 1900～1959. 数理統計学者。デルフト工科大教授。

私たちの逃亡の後、事務所の書類やアイソタイプの資料をかき集めてメッツ・アンド・カンパニーに保管できるようにした。彼は哲学者との書簡をピエト・ハーゼブレックに保管させた。ハーゼブレックはその多くを興味深々に読んだ。）

ある日のこと、エーレンフェスト夫人が訪ねてきた。物理学者の未亡人だ²⁶⁾。オットーと話す彼女の横顔を見ていたのはどこでだったか、もう覚えていないが、カフェーかもしれない。外套と、私の気に入った帽子、彼女の服装は実用的で流行に左右されていなかった。顔は青白く、シワだらけ。でもときに朗らかで、知的だった。その後少しして彼女をライデンに訪ねたとき、家の扉に呼び鈴のボタンが見当たらず、しばらく庭の扉の方まで周りをうろついた。やっと、通り側の壁面の真ん中に見つけた。一度押すとすぐ上の窓から彼女が外を見回し、それからドアを開けてくれた。この仕組みは良くできている、と彼女は説明してくれたが、でも、知らない人は困ってしまう！ 玄関先にはこの家に暮らす学生用の自転車が数台あった。彼女はよくそこを片付けていた、「あの人たちったら整理整頓する気がないんだから。」大きな居間には斜めに置かれた黒板とチョーク。何か書いたり絵を描いたりできるから、おしゃべりする時など役立つこともある。彼女の部屋では喫煙禁止、アインシュタインでもダメ。吸うんだったら自分の宿泊室に行かなくては。でも宿泊客たちにはすべてがうまく整えられていた。私自身、オットーの死後ここで経験したのだった。洋服ダンスは戸ではなく蓋式、上から引き出す形だった。丸テーブルの置かれた食堂にはチョークで描いた大きな花束の絵が掛けてあった。花束は、たぶん彼女の下娘ガーリアが庭でつくったのだ。庭は薮ボウボウで、裏には細い小川があり、夏はリンゴの木の下にデッキチェアを置いた。エーレンフェスト夫人はロシア人の母と同居していた。オットーはよくロシア語で挨拶を試みた、「ドスヴィダーニア！」夫人は熱力学や物理学、数学全般とともに計画経済の問題にも関心をもっていた。それどころかそれについては『Relevia』という小冊子を発行すらしていた。だからオットーとは議論することが山ほどあった。彼女は後年、ロンドンの私の家でフィリップ・リーガー²⁷⁾、ベルンハルト・ライヒェンバッハ²⁸⁾といった幾人かの私の友人の消息を伝えてくれた。彼女はこの訪問のために、79歳にして最初で、私の思うに人生一度きりの飛行機旅行を敢行したのだった。後に、もう一度私はライデンに彼女を訪ねた。その数日後そこからジョン・プロントが私をヴァッセナ

26) Paul Ehrenfest, 1880~25.09.1933, Tatjana Ehrenfest-Afanassjewa, 1976~1964. 夫パウルはヴィー
ンのユダヤ人商人の子。1904年にロシアの数学者タチアナ・アフアナシエヴァと結婚し共同研究を進
めた。1922年、オランダ市民権を取得。シュレーディンガー方程式を用いて量子力学と古典力学の対
応関係を論じた「エーレンフェストの定理」が有名。娘 Tatyana (1905~1984) は数学者、息子パウ
ル (1915~1939) は物理学者。Galinka (1910~1979) は児童書作家・挿画家。Galia は愛称と思われる。
27) Philipp Rieger, 1916~2007. ユダヤ系オーストリア人。非合法運動でダッハウ収容所送りを体験。
のちロンドンで経済学を学び、後年は母国で労働・経済領域で活躍した。

28) Bernhard Reichenbach, 1888~1975. ジャーナリスト。ドイツ独立社会民主党創設メンバーの一人、
のち共産主義者として活動。1935年にオランダ経由でイギリスに逃避。

ールに連れていってくれた。エーレンフェスト夫人は、私がそんなすぐに彼女の元を去ってしまうことに驚いた。このことはいまでも本当に申し訳なかったと思っている。彼女の人生は、悲劇の連続だった。彼女には二人の息子と二人の娘があった。息子の一人は精神的に正常ではなかった。父はそのことでいたく悩んでいた。ある日、彼は息子を銃で撃ち、そして自らをも撃った。長女には会ったことがない。彼女の子供の一人も正常ではない質だった。私は若いほうの二人、目映い才能に恵まれた次男と次女、つまりパリでジョリオ・キュリー²⁹⁾と一緒に仕事をしていた息子のパウルと、ガーリアだけは知っていた。私たちのオランダ時代に、パウルはアルプスにスキーに行き、瀕死の事故にあった。ガーリアは後にあるユダヤ人と結婚した。この人は、ナチ占領期のある日、家に戻らず、その後ガーリアは夫の消息を二度と聞くことがなかった。エーレンフェスト夫人は榎の木のような人だった。幾度もあらしが襲ってきたが、それでもちゃんと立っている。

オランダの私たちのところには、外国からさまざまな訪問者があった。エーファ・シューマン、ドーラ・ルッカ、ペピ・フランク、パウル。ヴォルフガング・シューマン³⁰⁾の訪問は、ちょうどチェンバレンがミュンヘンでヒトラーと会談した時だった。彼は小説を書く夢を語って、私たちにその一節を朗読してくれた。私の家族もやってきた。父とロロ³¹⁾、ウルゼルは中国と日本を訪ねた帰り道に寄り、ヘルムートとフリーデルは次女が生まれたあとでやってきた。クルト³²⁾は毎年来たが、いつもピンツェと一緒にだったかどうか、もう覚えていない。母も毎年訪ねてきた。彼女は訪問の時期を、いつもオットーが旅行に出ている時に合わせようとしていた。(母は1928年、ウィーンの私のところに来た。そのときもシュロスガッセのノイラート家に、コクシュタインと一緒に招かれた。だがコクシュタインには、役人の腐敗の一切合切をしゃべろうという哀れな想いがあったので、これが母を憤慨させた。私が仕事を終えて母のいる家に急いで帰ると、母は訪問の様子を話してくれた。ある日オットーは、私が彼のために全然時間がとれないことを嘆いた。それで私は彼と一緒に過ごして、その日は遅くなってから帰宅すると、母がそのことを嘆いた。30歳の誕生日は母と一緒にベルヒテスガーデンで祝った。母は再びよく歩けるようになっていた。オットーはザルツブルクの外れで私を待っていた。というの

29) Joliot-Curie, 1897～1956. 原子物理学者。1934年ノーベル化学賞受賞。世に有名なキュリー婦人の娘。

30) Wolfgang Schumann, 1887～1964. ライプツィヒで友人のオットーと戦争博物館を開く。バイエルン革命にオットーを誘い、オットーは逮捕されたがシューマンはその前に逃亡、一時仲が険悪になりかけたが、のちに修復。

31) Leopold Reidemeister, 1900～1987. ロロは子供時代からの愛称。戦後、美術史家としてケルン市立、ベルリン国立の美術館長を歴任。東洋美術研究の旅で1938年に日本を訪れた。

32) Kurt Reidemeister, 1893～1971. 数学者。ウィーン大講師の時オルガの兄ハンス・ハーン (Hans Hahn, 1879～1934, ヴィーン大学教授) を介してウィーン学団の思想に触れた。最初からマリーとオットーの仲を快く思っていない。

も、その日、私の手紙が来ないので心配になり、ベルヒテスガーデンまでやって来て、レストランを探し、そこに私たちが席を構えているのを目にして、安心してそこを立ち去ったのだった。私は彼を目にしなかったが、母も見なかっただろうと思っていた。だが母は少し後によく私にこう言った。「なんでまあ彼は、こんなところでも私たちを静かにしておいてくれないのかしら。」オットーと私がオランダとイギリスに旅行したのは、この後のことである。) また、たしか父が亡くなった後だと思うが、ママはリナ³³⁾を連れてハーグにやって来た。リナは私たちみんなに、そしてオルガにも、食事の世話をしてくれた。リナとお肉屋さんに行った時のこと、リナは当然の如くにヒトラー式挨拶をした。私は、オランダではそれはしないで、とお願いした。当時私は『ムーア人の兵士』を読んでいて、スイス人の俳優が強制収容所の体験を綴ったものだ。私はこの本を母のそばにおいたが、彼女は一度も手を延ばさなかった。クルトとの関係はまた違った。あるとき彼に「もし戦争になったら、私はドイツの敗北を望むわ」と言うと、彼は「ほくもだよ!」と答えた。オットーはクルトを心から歓迎したが、クルトは、ぎこちない笑い顔をするのが精一杯だった。母が最後に訪ねてきたとき、私は「戦争になったら私たちはイギリスに行きます」と言うと、彼女はこう言った。「なんでおまえが? だって、おまえたち、結婚してないじゃないの。」

私たちは結婚できなかった。なぜならオランダとドイツが、相互に相手国の婚姻法を承認していたからである。半ユダヤ人であるオットーは、「純粋アーリア人」と結婚するためには許可が必要だった。当然彼はそんなことをしようとはしなかった。パーミンガムにいる彼のいとこが、アルゼンチンに友人がいるから、彼がオットーをアルゼンチン人にする手配をとれるだろう、と言ってくれた。彼が本当にそうしようとしたのかは知らない。1940年の5月、空がドイツの戦闘機でいっぱいになった時になって、ようやくオットーは言った。「これでオランダは自国の法律でぼくたちを結婚させてくれるよ。」彼はピエト・デ・カンターに電話した。彼は空襲警報の真ただ中を私たちの家までやってきた。オットーは彼に、私たちが結婚できるよう手助けしてほしいと頼んだ。しかしこの時点では、もうそのための時間は全く残されていなかった。

オットーは何度もアメリカに行った。ある時の訪問で、彼は、アルフレッド・A・クノップ社との出版契約を持ち帰った。テーマはオットーに任された。彼は現代世界の描写を選んだ。そのテーマなら私たちはすでにたくさんの材料を持っていたし、必要なのは、ただ素早く作業を始め、新たにまとめ直すことだけだった。あるとき私たちはこの件について、シャイト通りの端にあるポストまでブラブラ歩きながら話し合った。私はこう言った。「そうよね、なにか独創的で新たなものをやるのに、このチャンスを利用しない手はないわよ。」こうして、少しずつ出来上がったのが、いわゆる画像テキストスタイルをとった『近代人の形成』である。図

33) Lina. 1869年生まれのリイデマイスター家の家政婦。マリーを幼児期からずっと世話した自伝序盤の重要人物。

像によるすべての描写のそれぞれが、あたかも一つの文として全体の文章の中に組みこまれる、というスタイルである。読者は、議論をきちんと追うために図像を「読む」必要がある。オットーと私そしてアルンツ³⁴⁾は、また出版社も、手を取り合って作業した。カラーページ配分についての出版社の規定を私たちは考慮せねばならなかったのだ。全体がダイキャスト、つまり一体造形の統一体で成っており、私たちが作成したものの中で一番素晴らしい本だった。様式の点では「社会と経済」や「鮮やかな世界」よりも統一性がとれていた。これは戦争の前にはもう出来ていた。オランダ語版とスウェーデン語版も準備された。クノップ社が次の本を申し込んできた時、オットーは全く別の提案をした。それはかなりの準備を必要とすることになりそうな、迫害と寛容の世界史というものだった。何かしらの理由があつてオットーは、ピッツバーグの百万長者エドガー・カウフマンを訪ねなければならなかった。彼は、フランク・ロイド・ライト³⁵⁾が滝の上に建てた家にすんでいた。彼はオットーの訪問中に来たマッサージ師と一緒に隣の部屋に行き、ドアを開けたままにしておいた。彼はオットーに「あなたの計画とはどんなものですか」と尋ねた。それでオットーがこの本の計画を説明すると、カウフマンはただちに興味を示し、計画への資金提供を約束してくれた。こうして私たちはオランダ逃亡までの間、月々四百ドルを得て資料収集を始めた。私たちは多くの時間をオランダ王立図書館で過ごした。私たちは、三十年戦争時のマグデブルクの炎上、再建、住民の三分の一にもなったユグノーの移住、といったユグノーの逃亡について文献を読んだ。後に私たち自身が小さな船で、夜間にイギリスを目指した時、「これで私たちも、ユグノーが当時どんな気持ちだったかが分かるよね」などと語り合った。資料収集では助けてくれた人たちが何人かいた。例えばオルガの義理の兄がそうだ。亡命者としてフランスに住んでおり、意義のある仕事を得て、それで少しはお金になることに喜んだ。彼の妻ルイーゼ³⁶⁾はフランスで亡くなったが、ウィーンの老いた母親にそのことを伝える勇気はだれにもなかった。彼女はいま子供をすべてなくしてしまった。最初に亡くなったのはハンス・ハーンである。私は、ハンスの妻リリーが夫の死後に、オルガに出した長文の手紙のことを覚えている。ドイツによるフランス占領の後、オルガの義兄ははじめミュンヘンで姿をくらましたが、その後ナチスに見つかって、送られてしまった。

戦争が勃発したとき、オットーはアメリカでの統一科学会議に出かけていた。私はオットーのラジオでチェンバレンの話を聴いたが、その時はたしか一人だったに違いない。三人姉妹の

34) Gerd Arntz, 1900～1988. デザイナー。社会経済博物館時代からの共同作業で「ヴィーン方式」の中核的担い手。Friedrich Stadler (Hrsg.), *Arbeiterbildung in der Zwischenkriegszeit. Otto Neurath — Gert Arntz*, Wien/München 1982に詳しい。

35) Frank Lloyd Wright, 1867～1959. アメリカの建築家。日本では東京の帝国ホテル旧本館の作者として有名。1936年、彼がアメリカ・ペンシルバニア州ピッツバーグ郊外の滝の上に建てたこのアメリカで有名な住宅（現在、世界遺産）は、以前、日本でもテレビ東京の人気番組「美の巨人たち」（2007年02月02日放送）で紹介された。

36) Louise Fraenkel-Hahn, 1878～1939. オルガの姉、画家。

一人は、私がオランダにいて大丈夫なのかと尋ねてきた。私は「いいえ」と答えたが、これは彼女を驚かせた。ヴァン・クレーク女史は私に（戦争勃発前だが、独ソ協定締結の後）、今度は私が母とこれまで以上頻繁に手紙のやり取りができるのか、と尋ねた。彼女はじつに信じやすい人だった。共産主義と関連するものはみな、人間性と自由との息吹を与えてくれるなんて。

アメリカから帰国するため、オットーは、指導的な人たちからもらった書簡をどっさり携えることで危機に備えた。イギリスが彼に、オランダに行くための自国通過を許可しなくなることをもっとも恐れていたのだ。私は彼を出迎えにロッテルダムまで出向いた。プロントが一緒に来てくれた。アメリカでは多くの人たちが、オットーはアメリカに滞在できる機会を利用すべきだ、と考えた。だが彼にはそんなことは問題にならなかった。

ある夜の十時ごろのこと、私たちが王立図書館を出ると外に兵隊がいっぱいて、とくに運河の橋の上にしては数が多すぎるのを不思議に思った。翌朝、空いっぱいに飛行機がブンブン飛んでいたが、これが1940年5月10日のこと。事務所では協力者たちと最後の顔合わせをした。秘書のアニー・ファン・ギンケル＝ミデルブルクが来て、たった今、外国人は道路に出てはいけないというラジオ放送があった、と言ってくれた。私たちはお別れをし、オットーは「みなさん、今は自分自身で決断しなくてははいけません」と言った。それから数日間、私たちは自宅軟禁で過ごした。聖霊降臨祭の季節で、素晴らしい天気だった。ドア口での買い物はまだ可能だったし、空襲警報が頻繁に鳴るなかでも温かい朝食を届けてもらった。降臨祭後の月曜日、プロントは一人の同僚と訪ねてきた。私たちは一緒に炎上するロッテルダムの空が紅くなっているのを眺めた。戦闘機の低空飛行がしばしばあった。平らな屋根のあちこちには、機関銃を持ったオランダの兵士が立っていた。私たちはついに、銃を向けられることなしに窓から出ることも不可能となってしまった。若い将校が兵士を一人連れてやって来て、私たちのところに武器がないかどうか探した。将校は私と一緒に二階に上がり、オットーはついて来なかったが、このとき将校は私たちが安全だと考えたので、二度と探索に来なかった。寝る前には私たちはしばらく階段のところにて、それからオットーは一階の、私は二階のベットに向かった。事態がうまく展開するわけがないことは分かっていた。イギリスかカナダの解放軍の上陸をあてにはできなかった。それでも夜は静かにぐっすり眠った。私たちのベットが一階と二階で上下に位置していたことで、私の心はいささか穏やかになった。翌朝、5月14日の火曜、私たちはいつでも出発できるように準備した。そしてあとはその瞬間を待つだけだった。午後になると、ダフィット・ファン・ダンツイヒが妻と首から認識票を下げた二人の子供を連れてやって来た。彼らはラジオでニュースが流れるちょっと前に私たちの元を去ったが、私たちには、彼らの未来になんら望みのないことはおよそはっきりしていた。温かい食事が届けられた。ちょうどその時に、オランダ参戦のニュースが流れた。同時にアニー・ファン・ギンケルが夫と一緒に、この同じニュースを伝えに来た。オットーは外套を着て、りんごをいくつかポケットに入れて—— ゆっくり食事している時間はもうなかった——「私は行くよ」と言った。私も外套

を着て「一緒に行きます」と言った。オットーが言う、「持つのは小さなハンドバッグだけでよ、そうでないと見とがめられるから。」アニーは気が抜けたように私たちを見つめたが、その顔色は青ざめていた。「どこに行くつもり?」「港まで。私たちは逃げるわ。でも私たちの荷物なんか心配しないで。まず自分の安全を考えてちょうだい」と私。私たちはそこを去り、鍵は持たなかった。持ち物一切を置いていくという決断は、私たちにはもはや難しいことではなかった。しょっちゅう自転車に乗っていたから道路は良く知っていた。私たちはスケーフエニンゲンの港への最短コースをとった。途中、私たちは、また外出できるようになって喜びに溢れる人たちを見た。私は、彼らが喜ぶのはまだ早すぎる、と思った。プロントの女友達にも会った。彼女は私たちに大きな声で「ねえ、そこで何してるの」と呼びかけてきた。オットーはただ「しっ、しっ」と先を急いだ。港には、木靴をはいてパイプをふかしている船乗りたちがいたが、助けを願い出るのにふさわしい人たちではなかった。さらに進んでいくと最後には浜に出た。オットーは、「もし船が見つからなければ、私は丸太につかまって水に入るよ」と言う。私たちは全速力で港を出ていこうとする船を見つけた——あれが最後のチャンスではなかったのかしら? 私たちは港の反対側に移動し、倉庫に半分隠れたタクシー船を見つけて、そこに急いだ。それは小さな船で、人がいっぱい乗っていて、武器をもった兵士も一人いた。だがずっと近付いてみると、そこにはゴルトシュミット博士と彼の妻もいた。彼女とは、三人姉妹の一人のお宅で知り合いだった。「この船こそ私たちにはピッタリだ」と、オットーは岸壁から船に飛び乗り、私も後に続いた。「足の骨、折らなかったかい?」「いいえ。」「ならホントによかった。」私は興奮してゴルトシュミット博士と握手したが、彼は何も気付いていないようだった。兵士はゴルトシュミット博士の娘婿だと分かった。彼は、私たちが飛び乗って船を揺らした時に空に向かって発砲したが、それは、近くにいる人たちがみな同じことをしようとするのではないかと心配したからだった。でも乗船したのは私たちが最後だった。四人の学生が少し前から船のエンジンをかけようと頑張っていた。まもなくエンジンがかかった。私たちが出発した時は、まだ夕刻だった。みな岸の方を振り返った。黒い煙害がたちこめていた。そしてロッテルダムの上空はまだ赤かった。私はこの国のことを思うと不安で胸がいっぱいになったが、同時に、私たちが逃げ出せたのは幸運だと思った。船尾に巻いておいてあったロープの上に二人で腰をおろした。オットーのおかげで落ち着いた。満月が昇ってきた。船首にはつねに二人が立って、機雷の見張りをした。乗員のあいだに会話が始まった。一人は私たちのことを知っていた。この人は、私たちが ISOTYPE の名称とシンボルマークを法的に保護してもらいに訪れた特許局に勤務していたのだった。百貨店バイエンコルフに勤めていた人たちもいた。オットーは涙に暮れているご夫人に「イギリスは戦時動員のために私たちみんなを必要としますよ」と言って慰めようとした。私は大きなゴム長靴を渡された。船には壁などなく、鎖のついた横棒があるだけだったので、私たちは波しぶきにさらされていた。しぶきが避けられるまともな座席は12人分くらいしかなかったが、私たち乗員は51人だった! 食糧を持ってきた人はだれ

もいなかった。私たちのりんごは傍にいた人と分けて食べた。もう一つの問題はトイレがなかったこと。でも広い海が私たちの回りにはあった。用を足す人は、力のある男性二人に支えられた。説得には骨が折れた。でも、私たちはみな同じ船の上じゃないですか、と。5月15日水曜日の朝が明けた。空は青く、海は静かだった。燃料はどこまでもつのだろうか。学生たちはそれを問題にしなかった。水平線にどこかの船が現れたときには、私たちの船はたしかにまだ航行していた。

私たちはこちらに気付いてもらおうと、向こうの船に見えるように、あるもの全部を船旗のところに付けた。オランダ国旗もあったので付けた。幸運なことに向こうの船が近付いてきた。しかし旗を掲げていない。片方の船の腹にDの文字と数字が読めた。Dは何を意味するのか、ドイツのD？ デストロイヤー（駆逐艦）のD？ 誰かが私たちに拡声器で呼びかけてきた。「いまそちらに行って助けます。」このとき私たちが、歓声をあげたのか、それとも安堵のため息をもらっただけだったのかは、もう覚えていない。この駆逐艦は「ヴェノマス」号という名前だったか？ —— 有毒という意味だけれど、私たちには救出者だった。もう一艘の船が全速力でやってきたが、こちらは兵士がたくさん乗ったオランダ船の「アチェ」号だった。アチェ号は駆逐艦の隣に、そして私たちのちっぽけな船はアチェ号の隣に止まった。そして私たちは縄ばしごをやっとこさの想いで昇った。私はまだゴム長をはいたままで、小さなハンドバッグを腕にかけていた。駆逐艦の上にはトイレや顔や手を洗うお湯、お茶、スィスロール、バナナ、そして温かな歓迎があった。私たちは素晴らしい高速でドーヴァーまで連れてこられた。ここで私たちはパスポートを検査されたが、何ということか、私たちの多くが「敵性外国人」であることは隠しようがなかった。60歳以上の男性は全員ただちに拘束された。オットーはわずかな時間を利用して、私たちのささやかな手持ち現金を私と半分ずつにした。それから私は突然一人になった。でもそれは長くはなかった。国境管理官が私を手招いて、若い夫婦のところに来るように呼んだ。夫が妊娠している妻をだれか信頼できる人に任せがっていた。彼は船の上で、私がこの夫婦を観察していたのと同じように、私たちのことを観察していたのだった。まもなく、兄と離された別のご婦人方も私たちに加わった。私たち女性是一緒に座り、オランダ人と一緒にロンドンのヴィクトリア駅まで連れていかれた。ここで私たちは、このあとの私たちの処遇について決定が出されるまで、ずいぶんと待たされた。そこでは男性の一人が、なぜ私が、あきらかにユダヤ人でもないこの私が、逃げてきたのか、と尋ねてきた。私は、逃げるのにはそれ以外の理由もあるのだ、と言ってやった。男性たちが相互に私のことを話しているのが耳に入った。私は「五体満足（an able-bodied）」なのだそうだ、私は彼らにはすごく快活に（versachtig）に映っていたのだ。その後私たちは全員フルハム収容所に運ばれた。ここには温かい風呂があった。寝る時は、床にしいた毛布の上で寝かされた。硬いかかとの靴を履いた女性たちが絶え間なく広間を歩いていた——これが一睡もしない二日目の夜だった。翌朝には医療チェックがあった。電話器があり、これは使ってもよかった。私はドーラ・ルッカ

を呼び出して、私とオットーの二人がロンドンにいることを話し、私の住所を伝えた。彼女は直ちにやって来た。その間私はスーザン・ステビン³⁷⁾に手紙を書き、これを送るための許可を得た。そしてドーラ・ルッカに投函してもらうよう持たせた。陽のあたる芝生で私は寝入ってしまったが、また起こされた。ドイツのパスポートをもつ私たち女性は、婦人警官の監視の下、車に乗せられた。私は街路名標識に注意していたが、ペントンヴィル刑務所の近くに来たことを喜んだ。オットーがそこにいることを知っていたからだ。その後のこと、予想もしなかったが、男女が別々に収監されることを初めて知らされた。私たちはホロウェイまで連れていかれた。

37) Susan Stebbing, 1885～1943. 分析哲学者。英国初の女性哲学教授、ISOTYPE 活動の支援者。